枉を率ありとも。従来粉骨の忠勤に免ぜられ。召返させ給ふに於てをや。某等まで大悦なりと。詞を盡して御解謝ましませど。決して御許容なかりしかバ。苦諫を容るゝとも。益なかるまじと口を閉嘘して退出しけるが。此に追で竹中が最期の時に言遺せし。敵国滅して謀臣智士亡せらるの遺語を感じ。骨に徹して歎懐し。今日ハ他の身なりとも明日ハ我身の上ならんと。おもへバ佐久間林が身のなる果を哀に欽じ。落涙数行止めざりし。右朋輩の好ハ深し。いさゝかなりとも落魄の。年若を帮助得させんとおもへど。栗林が零居を尋ぬるに。林ハ三州へ赴きたるよし。道路なれバ秀吉もすべなく。断念さと雖れど。潜く使士を遣しつ。金銀衣服を饋贈ハ。又佐久間信盛父子ハ高野山に寥居ましと聆。秀吉身から高野に到りて佐久間を尋給。對面ましますに。昨日の高門貴堂に似ず。今日の栖家の寥ましく。女牆の頽も蕭然として。補ふものハ无拒蘿のみ。筵の筍抽出て。床根より破席を刺も相ハ。凡ぞる織の双に似たり。あるじが纏ふ褸絶子ハ枯松の枝に兜羅の絡着たる有様なり。筑前守熟着て。おろしと悲哀を催しつゝも。秀吉なりと名通れ。佐久間父子ハ夢のごとくなり。膝の塵さへ掃ふ事忘れ。轉出て迎賓ま。茶烟の湧ぶに事缺バ。徊みて欸待のみ。佐久間ハ今更往日の奴心に羞入て。身を縲る許なるに。秀吉ハ此ふましく。信を竭して慈切に舊交の情語数刻に及び。おくそことあるに詞の末に。織田家に帰参ある時の。事ぞくも有らんその折に。欲の貝代纏ますさんと。別を疑ひ掌て云。信盛が嫡子甚九郎ハ。秀吉が慈愍の友なる事をて。ことさて情恩のつきなく。金銀衣服を若干あたへ。涸を愁んで帰られけり。嗚呼義なるかな信なるかな。日